2021年7月23日　於　室伏鴻アーカイブカフェShy

室伏身体あるいは観念発光体

江川隆男

並行論の定理――室伏身体あるいは観念発光体

(1)「人間精神を構成する観念の対象のなかで起こるすべてのことは、人間精神によって知覚されなければならない。あるいはその物について精神のなかに必然的に観念があるであろう。言い換えると、もし人間を構成する観念の対象が身体であるなら、その身体のなかには精神によって知覚されないような（あるいはそれについて或る観念が精神のなかにないような）いかなることも起こりえないであろう」（スピノザ『エチカ』、第二部、定理一二）。

(2)「1　だから、踊ること、それは単に踊ることではない。感じることだ。／踊ること、それは、変形、そしてそれを感じること。最初に私の身体が、いや、最初から最後まで徹頭徹尾、身体が〈変形〉へとさらされねばならぬ」（室伏鴻「踊ること――変形すること」、一九九〇年代）。

(3)「2　〈変形〉、それはまず、破壊でありそして生成である。／そこには必ず、移行・移動がある」（同上）。

(4)「3　踊ることは、踊りはじめる前に、すでにその変けいとともにあらわれる。／私が非‐私へと移行しようとするその移行の中に、踊りがひそんでいるのだ。「命にかたちが追いすがる」（土方巽）」（同上）。

(5)「5　その度毎の変形において、／私とは、死につつあるもののことだ。そして破壊されるかたちと破壊する力の双方を同時に生きつつあるもののことだ。／しかし、私に死の引導を渡す力こそが、私を非‐私の生成へとつなぐ力でもある」（同上）。

(6)「6　だから踊りは、それ自身の振動のなかで、生へも死へも結ばれた力の両義性を生きる。変形しつつある身体の痛みを、その変形をもたらす「なにものか」と共有する境界の体験なのだ」（同上）。

――→ 身体の変様と非身体の変形の極限での不調和的一致

別の身体へ

(7)「人間の身体が死ぬしかないのは、ひとがその身体を変形し、変化させることを忘れたからである。／それ以外は、人間の身体は死にもせず、砕かれもせず、墓場に葬られもしないのだ。／……／人間の身体は不滅であり、不死である。そしてそれは変化するのである。／……／或る身体から別の身体へ／身体の衰えた無力な状態から／身体の強化され、高められた状態へ」(アントナン・アルトー「演劇と科学」、一九四七年)。

(8)「われわれは、この生において、とくに幼児期の身体を、その本性の許す限り、またその本性に役立つ限り、もっとも多くのことに有能な別の身体に、そして自己と神と物とについてもっとも多くのことを意識するような精神に関係する別の身体に変化させようと努める」(スピノザ『エチカ』、第五部、一六七五年)。

(9)「いつでもない〈今〉、どこでもない〈ここ〉。／肉体の〈外〉へ出ていってしまった肉体。／別の肉体。別の言葉。／あるいは、自己の肉体を自ら喰い尽くし、自己という姿形を消失したまま、〈無いという状態で在る〉肉体」(室伏鴻［私にとって〈技術〉ほど無縁の観念はない］、一九九〇年)。

墓場

プラトンの説の一つ、ソーマ・セーマ説。身体は墓場である。
アソーマ・アセーマ、非身体的なものは、非記号的である。

(10)「生きるとは、身体＝力の「切実さ」の〈運動〉である。それは、その切実さによって感染する。エフェメラル、はかない。はかないとは、〈墓がない〉ことなのだ。自身の身体が墓である」(室伏鴻「真夜中のニジンスキー」、二〇一〇年)。

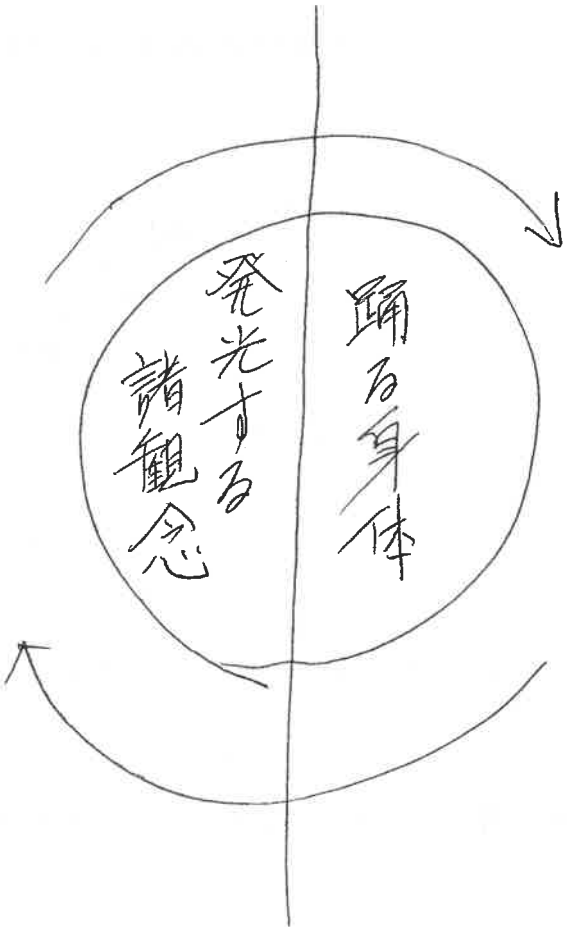
無限

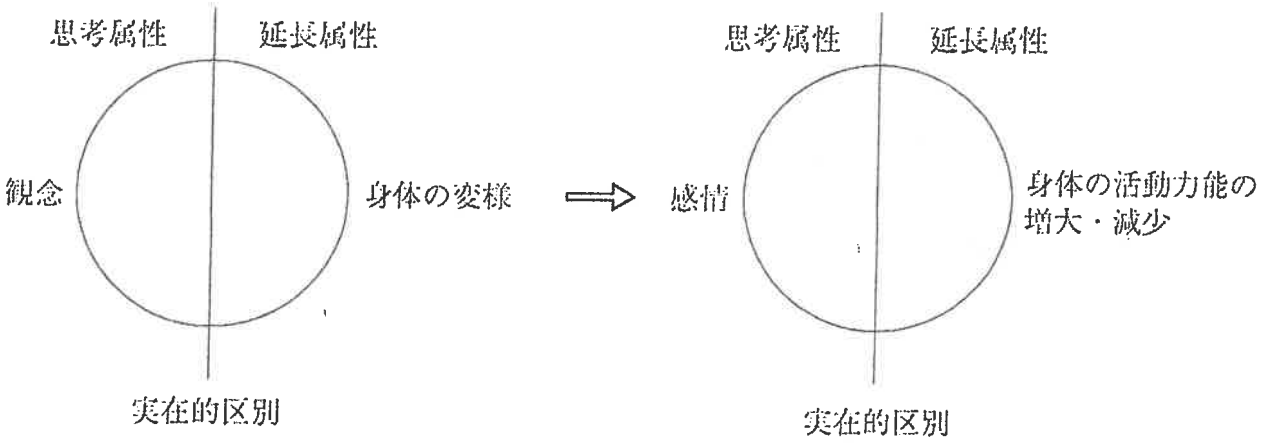
(11)「肉体はここにあって、とどかない。いちばん近くにあって、無限の遠さにあるもの」(室伏鴻［肉体はここにあって‥‥］、一九九〇年代)。

(12)「無限の近さと無限の遠さにあることは、距離を生きることだ。いつもそれが隔たりとして在るということだ。／私たちは無限であることからは、無限に隔てられている。／私たちは隔たりを無限に数え、無限に意味づけることができるだけだ。／つまり私たちは終わることが無い、終わることが出来ない、／近さや遠さを数えたり、意味づけしたりしつづける／私である限り、隔たりこそ無限である。／私とあなたが、切り放たれてあること、そのことが無限である。／ところで、無限とは何か？無意味である。いかなる意味も数値もそれにとどかない無意味である。／有限であるとは、意味であることだ。／そして、

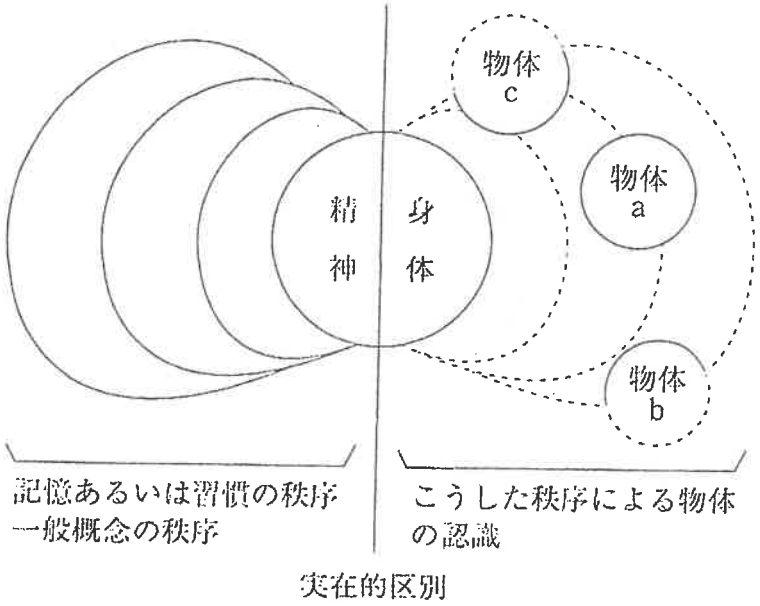
私たちが有限であることが、もうひとつの無限である。／えっ、無限が二つ？」（同上）。

踊る――減算する身体



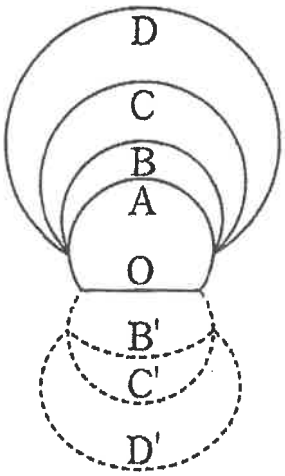


［図 1-5］精神と身体との間の並行論的最小回路



江川『スピノザ『エチカ』講義』

［図 1-6］精神と身体の巨大回路（「第七講義」の［図 7-2］も参照せよ）



ベルクソン『物質と記憶』